



## 若手ではなくなった一大学教員の雑感, そして新編集委員長としてのお願い

澤本卓治<sup>1</sup>

2017年4月より本誌「土壌の物理性」の編集委員長を担当しております澤本卓治と申します。よろしくお願ひいたします。巻頭言執筆の機会をいただきました。学問的感銘を与えるような内容を書くことができそうにもありませんので、これまで感じ、考えてきたことについて記してみたいと思います。雑感になりますがお許しください。

江別市（北海道札幌市の東隣り）にある酪農学園大学に2003年に赴任してから14年間の経ちました。若手と思っていましたが46歳となり、若手ではなくなりました。前職は農業環境技術研究所でポスドクを2年間、その前は北海道大学で学部からポスドクまで10年間在籍しました。現職は研究重点大学ではない地方私立大です。赴任してから現在まで、ありていに言えば、どのように教育と研究のバランスを取っていくか、もっとはっきりいえば、どのようにして研究者として生き残ることができるかを考えてきました。

「良い研究ができる人は良い教育ができる人が多い」（だから、大学教員はまずは研究ができなくてはだめだ）とか、「多少の資金があっても、研究室に兵隊さんがいなければ何もできなよね」（だから、学生を確保して何としても手足となって動いてもらわなければならない）といったことがよくいわれます。正しいことのように思われますが、そのように上手く（？）できていると感じることはほとんどありません。もちろん、そのほとんどの原因は私自身の能力不足や工夫が十分でないことによるものです。

しかし、切れてしまいそうな糸を慎重に手繰り寄せるようになんとかやってきました。そして、上記のような正しいと思われることが全てではないということも感じるようになりました。思い描いたように進めることができないなか、重圧に潰れず腐らずにやっていくにはどうしたらよいか、という個人的境遇の方程式の「解」を探してきたように思います。

大学が研究機関と大きく異なることは、学生に平易なことばで学理を語るということが日常的に要請されていることです。専門基礎の授業である「土壌学」を担当して数年が経ちました。時に300名を超える大人数の授業ですが、出席・成績に関係なく任意で学生にコメントを毎回書いてもらっています。提出する学生は10%程度ですが、一見極めて稚拙・素朴と思われる質問にも、筆者の専門領域からややはずれている質問にも丁寧に回答し、次の授業に印刷・配付しています（もちろん全てには回答できるわけではありませんが）。15回の全授業でA4用紙30~40枚となるやや大変な作業です。回答用紙がどれだけの学生に真剣に読まれているか不明ですが（アンケートからみると好意的に受け止められています）、これにより筆者の知識が整理・拡張され、大変鍛えられています。このことは一例ですが、学生との対話プロセスこそが大学教員の強みであると最近感じるようになりました。これですぐに研究・教育が万事うまくいくということはありませんが、大学教員の基礎体力が少しずつ高まることは多くの大学教員経験者が感じておられるかもしれません。

もうひとつは卒業論文研究です。筆者が所属する学類は一研究室一教員体制であり、大学院に進む学生の割合が低く、筆者が担当している土壌環境学研究室では、残念なことにいまだに所属大学院生がゼロのままです。このような状況では、筆者の研究の一部を卒論として位置づけ、多くの学生には手足となって動いてもらわなくてはならない、全ての卒論は教員の私がまとめて論文等としなくてはならない、という気持ちでやってきました。これは間違っていないと思う反面、これ（だけ）で良いのだろうかと考えるようにもなりました。

STAP細胞をめぐる騒動がひとつのきっかけでした。『嘘と絶望の生命科学』（榎木英介著、文春新書）や『研究を

<sup>1</sup> 酪農学園大学 農食環境学群 循環農学類

深める5つの問い』(宮野公樹著, 講談社ブルーバックス)などを読み, 教員として反省すべき点や研究者としての思考を磨くことが不足していると感じました。某国立研究開発法人に所属する知人研究者の自嘲的な冗談「所管の省庁からの指示や資金があり, 常に成果と論文が求められる。自販機になったような気分だ」が, 心に突き刺さったのもひとつのきっかけでした。

現状では筆者も学生も自販機になりたくてもなれません。筆者が所属する学類では卒論は必修でなく(選択科目), 学生も多様です。「馬を水辺に連れて行くことはできても, 水を飲ませることはできない」(卒論は面白いよ!と学生に説明しても卒論を履修しない)ことが多々あります。しかし, 意欲と根気がある学生をしっかりと指導し, 細々とも現場的な実証研究を行っていくことは可能であり, これを大切にしたいと改めて考えるようになりました。幸いにも本学は農家子弟など農業現場に近い学生が多く, 学力が高くなくとも, 時としてユニークな研究が展開できるかもしれないという強みがあるのではないかと考えるようになりました。

多くの大学に共通することかもしれませんが, 初年次教育からはじまり大学院教育の実質化, 学外との連携(高大連携や研究プロジェクト等), 学内行政など多くの業務があります。このような境遇で, 身体的な体力を維持し, 研究者・教育者としての基礎体力を高めながら, 零細個人商店として細々とも実証的卒論研究を積み重ね, 場合によっては先端的研究にかかわることができ, さらに学問の本質を深めることができるのかもしれないという希望的な「解」があるのかもしれない。

学会員のみなさまはそれぞれ多様な環境に置かれていることと存じます。本巻頭言は一学会員の境遇や雑感としてご覧いただけましたら幸いです。また, ご批判や叱咤激励をいただく機会がありましたら, 大変ありがたいことと心から思っております。

最後になりますが, 編集委員長となり, すべての原稿によく目を通し大変勉強になっております。改めて土壌物理とその周辺領域の奥深さや重要性を感じています。ただ, 今期の編集委員会が4月から発足してから約半年間ですが, 「土壌の物理性」への投稿数が例年と比較して極めて少ない状況となっています。その原因は不明ですが危機感を持っております。特集などを編集委員会で企画して誌面を充実させたいと考えています。

しかし, 学会誌の基本は学会員からの投稿です。「土壌の物理性」は論文・研究ノート・総説・解説・研究紹介・資料・土粒子といった多くの投稿原稿区分を持っています。学会員のみなさまからの積極的な投稿をお願いします。また, 本年10月の土壌物理学会のポスターセッションを拝見しましたが, 投稿論文とすることができそうなポスター発表がいくつかあると感じました。特に, 若手のみなさんからの積極的な投稿で業績のひとつとしていただき, 学会誌を盛り上げていただけたらありがたいと思っております。